



このところ日本の政治のリーダーは目まぐるしく変わっている。結局彼らにはトップに収まる力量がなかったからだと言え、それまでだが、はたしてそのような器の人間が必ず初めから存在するのだろうか。その地位や時間が人を作ることもあり、ある程度の失敗や慣れの繰り返しも必要ではないだろうか。

一方我々がよいと考えリーダーを選んだのだから、ダメと烙印を押す我々にもそれなりの責任がある。そう考えると辛抱してリーダーの成長の可能性に賭ける、応援するという度量があってもいいような気がするが、いかがであろうか。だが失敗を認めない雰囲気、今の世の中にはある。

大抵の人間は結果が出せないと自信をなくし自

医師会という組織の新生のために

情報広報部長 山科 賢児

分を責めてしまう。特に真面目な人ほど不安になり落ち込む傾向があるのに、何故か今の政治家という人種は普通とは違って自責という感性はないのかもしれない。またそうでなければ政治という職務はできないのだろうか。もしかしたら彼らの多くも敢えて弱みや本音を見せず、表面的にはむしろ自信たっぷり振舞って自己防衛をしているだけなのかもしれない。それにしてもリーダーを選び育てることは非常に難しい。

日本のどの組織の制度も疲弊、硬直化し時代に適応しなくなっている。63周年を迎えた北海道医師会も同様にシステムに問題を抱えている。長年、北海道医師会は北海道の医療問題について検討、議論し対策を講じてきたが、ここに至りては健保対処

費の処理、新公益法人への移行に伴う定款変更、会費減免などの組織の問題も懸案となっている。これまで北海道医師会の活動を支え、発展に寄与してきた基盤となる制度、財政が残念ながらここにきて処理、変更しなければならなくなっているのである。北海道医師会は日本医師会と郡市医師会の橋渡しをして、北海道の医師たちの要望、権利を中央に主張する一方、郡市医師会と協力して北海道民のために有効な医療活動、情報伝達を行ってきた。しかし制度上、財政上に不都合が目立ち始め北海道医師会としての活動に支障を来すようになったことも事実であろう。もっとも大切な課題である北海道の医療崩壊阻止に有効な手を打つことができなくなり、会員、組織の停滞感、閉塞感、無力感、否めなくなってしまう。

旧くたて時代に対応できなくなった組織の規則、制度を内部からの力で変えるには非常なエネルギーを必要としほとんど不可能に近い。そうなることと変化

のきっかけを外圧に求めざるを得ないこともある。幸運にも北海道医師会も含めどの医師会にも制度改革の機会が降って湧いてきたように訪れた。それが現在検討されていて2013年12月1日までに移行しなければならない定款変更問題である。一見税制上の変更だけと考えられるが、その変更の趣旨の意図は組織の近代化、財政の明朗化である。この制度改革によって税制はもちろんだが、医師会の体制の変更、つまり選挙制度の変更、組織運営方法の変化、理事会の権限の強化がなされることになる。ならばこの機会を利用して、医師会の抱えている問題解決の観点から定款変更を検討してもいいのではないだろうか。

それではどのような定款にすればいいのか。それは多少ともリスクを伴っても起業家的な意志決

定を行い、それを実行し、その活動の成果を率直に評価することが可能な医師会となる定款でなかろうか。さらにその定款によって医師会員の中から医師会活動に指導力のあるリーダーたちの登場が可能であること、そしてリーダーを支えるバランス感覚のある人材が登用できること、さまざまな知識、技術を持つ人材が集まり医療をよくすることを目指すチームを編成し実行できること、これからの医師会が向かうべき目標を描き社会にアピールできること、そして会員からの会費を有効に使う医師会をマネジメントできること。そんな定款を作れないだろうか。

北海道医師会がブロック医師会としての存在を示せるかどうか、今がまさに正念場のような気がする。現在の医師会の経営はもちろん大切だが、10年後、50年後の医師会像を考える絶好の機会である。変更させられるという受身の姿勢ではなく、自ら積極的に北海道医師会らしい定款を持つよい機会と捉えてはいかがであろうか。ただこれらの問題を意識、解決するには従来の知識、経験だけでは不十分である。リスクを厭わない柔軟な感性を持つリーダーたちの登場とそれを認め協力する環境が必要である。

最近、非営利組織である高校野球部をモデルにマネジメントをやさしく解説した、略称「もしドラ」が話題となっている。あの女子高校生みなみが医師会のマネージャーになったらどうであろうか。おそらく「今やどんな医師も純粋な専門知識、技術を身につけているだけでは不十分な時代です。医師会という組織を動かすには今まで以上にマネジメント、コミュニケーション力が必要ですよ」と助言してくれるような気がする。定款変更問題は医師会を新生する絶好の機会であり、医師会の「使命」「事業」とは何かと考え直すまたとない機会とならないであろうか。